

自立する 村民出資会社の 限りなき挑戦



(株)吉田ふるさと村代表取締役
 高岡裕司さん



「たたらの里」雲南市吉田町

村民出資による 株式会社設立

島根県松江市から、車で1時間ほど南の斐伊川の上流域は、いわゆる「たたらの里」です。千年以上続く「たたら製鉄」は日本独特の製鉄法で、中世以降、この地域で盛んとなり、日本刀をはじめ、農機具や生活雑器の代表的な生産地でした。

株式会社吉田ふるさと村は、その「たたらの里」にあり、たまごかけご飯専用醤油『おたまはん』の製造・販売で一躍全国的に有名になりました。

「たまごかけご飯」に郷愁を感じる人々に、圧倒的な支持を受けることになり、そのブームの火付け役となったのです。

この会社は昭和60年(1985)に、地域産業の振興・雇用の場の創出を目指して、第三セクター方式で設立されました。設立当時は、資本金1500万円、従業員6名で出発。30年後の現在は、資本金600万円、従業員67名。旧吉田村では有数の企業に育ちました。

昭和58年(1983)、旧吉田村に村民を中心とする「むらづくり委員会」が発足しました。その背景には、地域産業の衰退に対する村民の危機感があつたのです。「たたら製鉄」は大正年間に途絶え、その後は林業や製材・製炭業などで生計を立てていましたが、産業の衰退と急速な過疎化によって、昭和30年代に約5000人だった村の人口は、60年代には2800人まで落ち込みました。

昭和60年に、村は地域産業の振興・雇用創出を目指す「吉田ふるさと村」構想を発表することになります。

昭和60年4月、村役場から500万円、発起人や村民37名から1000万円の出資によって、資本金1500万円で吉田ふるさと村は設立されました。出資希望者が多かったため、その直後に増資。地域課題を解決する「わたらの会社」への村民の期待が結実する「村民出資会社」の誕生でした。商工会から代表取締役専務が就任。設立時の職員は全員ブローパーで、村は経営に立ち入らないと決めました。

たまごかけご飯専用醤油 『おたまはん』の爆発的ヒット

平成7年、国や村の支援を受けて、本格的な加工施設を建設。それを機に、加工品の販路を、従来の県内中心から、大消費地へ拡大する営業方針に切り替えました。東京や大阪の旧吉田村出身者を訪ねて、「村民出資・安全無添加」をウリに、販売網を広げていきました。

「地域商社」などという言葉のない時代に、小さな村の「大きな挑戦」でした。

ギフト用の乾燥シイタケや、笹巻(ちまき)、惣菜類の製造販売から、味の良いことで知られていた米で作った餅の実演販売など、順調に売り上げを伸ばしていきます。

平成12年、卵の販売に苦労していた県外の養鶏業者から相談を受け、加工食品の開発を持ちかけられました。そこで、社内で頻りに検討を重ねた結果、生まれたのが「たまごかけご飯専用醤油」というアイデアでした。試作品の試食を繰り返して、平成13年に製品が完成。『おたまはん』というネーミングも決まりました。発売前にモニター調査を行い、みりんを少なくした関東向けの『おたまはん』も開発しました。

「東京のマーケットを強く意識したのは、少量・多品種で少々高くても、安全なものニーズが高いことと、ユーザーに商品の詳しい説明ができ、丁寧売っていただけなのは、やはり東京だと思ったからです」と、現在の社長の高岡裕司さんは



「道の駅たたらはち番地」で販売されている「たまごかけごはん」



島根 SUPER 大使「吉田くん」ラベルの『おたまはん』。左が関東風で右が関西風



創業以来、無添加で安心手作りの商品がモットー



「神戸そごう」での
実演販売



「日本たまごかけごはんシン
ポジウム」のポスター



㈱吉田ふるさと村の商品群

平成20年(2008)、「吉田ふるさと村」は、野菜の直接栽培に加えて、翌年には観光旅行業にも進出します。平成22年には、第三種旅行業に登録して、「着地型のツアー商品」を開発しました。

地域資源を活かした 着地型観光商品を開発

平成16年から管理を受託している

語ります。 名古屋以西の客向けに関西風の味付け、名古屋以東には関東風と2種類の「おたまはん」で、発売を開始します。

当初、1万本の販売目標を立てていましたが、実際には約3万本売れるというヒット商品となりました。その後、地元新聞の紹介記事から口コミで評判が広がり、テレビや全国紙で紹介されると、一躍、全国的に知られる商品となりました。

平成17年10月、吉田ふるさと村が中心となって『日本たまごかけごはんシンポジウム』を開催します。自治体、商工会、学校、各種団体が協力して実行委員会が結成され、卵かけごはんに関するレシピ、作文や論文、キャラクターデザインなどを全国から募集しました。

当日は約2500人の参加者が集う大規模なものとなり、多くのマスコミがその様子を伝え、「雲南市吉田町」の名は全国に広まりました。この後、『日本たまごかけごはんシンポジウム』は毎年開催されることになり、昨年度で14回を数え、吉田町の秋の恒例イベントとなっています。

「経済的価値」と「社会的価値」を同時に実現する難しい事業戦略という意味で、「株式会社吉田ふるさと村」は、ひとつのロールモデルとして注目されています。

「発足当時から『仕事場をつくる・自立しよう・利益を出そう』と走ってきましたが、地域の活性化を目指す『村民出資会社』という公共性もあり、地域ニーズに対応する責任があります。事業収益を上げると同時に、それに対応するソーシャルビジネスの展開も視野に入れていきたい」

現在進行しているのは、『よしだむら』、『菅谷たたら山内』を巡るマイカーツアーや『ほたる観バス』、『トロツコ列車』、奥出雲おろち号、撮り乗り旅タクシープランなど。現在は、こうした食品加工や旅行業といった収益事業の他に、管理運営委託事業も、会社発足時に比べて増加しました。

平成25年には、雲南吉田ICの『道の駅たたらは吉番地』の管理を受託。駅内の立ち寄り軽食『TATA ALLOVER』たたらばの営業も開始します。その他、簡易水道施設の管理や市民バスの運行など、多彩な事業展開になっています。

高岡社長は今後の抱負を、次のように語っています。

「たたら製鉄体験ツアー」の様子



日本の山林王として名高い田部家の土蔵群



平成27年に開催した「たたら製鉄体験ツアー」の様子



国重要文化財に指定されている「菅谷高殿」。大正時代までこの場所で「たたら製鉄」が行われていた